

# 『南京大虐殺』前後の新聞報道

## 一般市民は何を知ったか

日本大学国際関係学部国際交流科 2 年

安田圭佑

### はじめに

南京大虐殺とは、1937年12月13日から約6週間から2ヶ月にわたって、中国・南京で起こったとされる日本軍による無差別大量虐殺だ。それから70年以上たった現在でも、一般の日本人はこのことについて知らず、それどころか中国侵略とは具体的に何であったかも自覚していない。<sup>1</sup>中には南京大虐殺は史実ではない、と言う政治家もいる。しかし日本以外の諸外国では、旧日本軍による南京での無差別大量虐殺は *Nanking Atrocities* という一般常識になっている。特に中国では、南京大虐殺に関する書物が大量に存在している。こうした知識の非対称性は、日本が国際社会との相互理解を強めていく上での大きな障害に思える。

当時の日本国民は、軍部の厳重な言論統制下におかれていたので、このような大変なことを全く知らなかったのだろうか。そしてそうした無知が戦後も延々と続いて今にいたっている、と言ってしまえるものだろうか。このリサーチでは、日中戦争開始直後の1937年8月から、大虐殺が収束したと見られる1938年2月という時期を選び、その間に朝日新聞がどのように中国戦線における日本軍の戦いぶりや、南京陥落前後の日本兵の様子を報道していたかを考察

する。検閲が厳しかった当時に、大虐殺を臭わせるようなことが書かれてあれば、当時の庶民もすでに何かを感じていたのではないだろうか。70年以上が過ぎた今、「南京大虐殺」に関してわれわれの世代が何を真実として、国際社会に向かいあうべきかを考える手がかりとしたい。

## I. 南京大虐殺とは

すでに戦争中、南京戦を戦う日本軍兵の心境や彼等の殺戮行為を扱い フィクションながらリアリティを追及した石川達三氏の『生きている兵隊』という作品が書かれている。著者の石川氏は第一回芥川賞を受けた気鋭の作家で、南京陥落の1ヵ月後に中国戦線に赴き、現地で取材したことを題材にこの作品を執筆し、1938年8月の『中央公論』に発表した。しかし即座に発売禁止となってしまう、あらためて発表されたのは戦後になってからだ。彼が南京に到着した時の回想には、南京市民は難民区に隔離され、町のなかにゴロゴロと死体がころがっており、死の町という言葉がピッタリで、はじめて目撃した戦場はショックだった、とある。<sup>2</sup> 石川氏は次のように語っている。

国民は出征兵士を神様の様に思い、我が軍が占領した土地にはたちまちにして楽土が建設され、支那民衆もこれに協力しているが如く考えているが、戦争とは左様な長閑なものではなく、戦争というものの真実を国民に知らせることが、真に国民をして非常時を認識せしめ、この時局に対して確乎たる態度を採らしむる為に本当に必要だと信じておりました。殊に南京陥落の際は提灯行列をやりお祭り騒ぎをしていたので、憤慨に堪えませんでした。<sup>3</sup>

石川氏の言葉には、日本に暮らす国民が抱く戦争に対する考え方が、戦地の兵隊のそれとは全く異なっていることへの苛立ちが感じられる。

第2次世界大戦後、アメリカによる日本占領が始まると、報道検閲によって日中戦争に関する論争・報道は厳しく規制されるようになる。戦後日本で南京大虐殺が注目され始めたのは、1971年から朝日新聞に掲載された本多勝一氏の『中国の旅』という連載記事がきっかけだ。本多氏は、中国人が見た軍国主義日本の姿を掘り起こし、南京大虐殺は軍の最高方針による計画的虐殺事件というより、侵略軍というものが持つ本質的性格が典型的に現れた結果、と述べている。<sup>4</sup>

第二次世界大戦、とくに太平洋戦争を「人種差別感情」という視点で分析したアメリカの歴史学者ジョン・ダワー（John Dower）氏の作品 *War without Mercy*（1987：邦題『容赦なき戦争』）では、日本人が他のアジア人に対して抱いた人種的優越感情の傲慢さを指摘し、南京で日本軍が犯した具体的な残虐行為として、日本刀での惨殺、修道女のレイプと殺人、拷問にかけた英人を木に吊るす、生殖器を切り落として口の中に入れる、などの例を挙げている。ダワー氏は、こうした日本軍の行為を「奇妙で理解し難く、正義からかけ離れた明らかな逸脱行為」と批判している。<sup>5</sup>

当時の朝日新聞の報道には、これほどまでにすさまじい残虐行為があったことをにおわすような記事は出ていたのだろうか。

## II. 虐殺前夜の報道

ある人びとを大虐殺するには、理由があるはずだ。大虐殺の2ヶ月前、1937

年 10 月 24 日付けの朝日新聞記に載った『支那の子供たちを可愛がる我が将兵』という記事では、日本の兵隊が中国の子供を可愛がる様子が報道され、「これは俺の子供だ」と言う日本兵がいる、とまで書いてある。しかし、注意深く他の記事を読むと、中国の人びとの描写の仕方は今の感覚では首をかしげるものが多い。1937 年 8 月 19 日付けの新聞には『支那人今や死に物狂ひ』という記事が載った。上海での戦禍に動揺した青島市の市民が、一斉に同市を逃げ出し始め大混乱になり、青島市は地獄と化した、というエピソードだ。記事は、逃げる際汽車から振り落とされて死ぬ者が 10 名から 20 名いたことを伝えるが、「あの世への非難行とはつくづく恵まれぬ人々だ」と、何とも突き放したような冷淡な感想が付け加えられている。さらに記事は、青島市の中国人が逃げていなくなってしまう、現地の日本人が生活に迷惑しているとまで書いている。<sup>6</sup> 上海の戦禍に日本は無関係、といわんばかりだ。1937 年 9 月 22 日付の記事では、活路を断たれた第一線の中国兵は 1 日 1 食しか食べられず、痩せこけて眼ばかり光って、日本兵がパンを見せると 30 人ばかりの中国兵が先を争ってパンを喜んで食べた、と報道されている。問題は、この記事には『敵はみな餓鬼』という残酷な見出しがつけられていることだ。<sup>7</sup> 実際当時の朝日新聞には、中国の軍や市民を「劣等」、「卑怯」、「暴虐」と罵るような記事が目につく。1937 年 8 月 10 日付『卑怯な支那兵の暴虐』、8 月 16 日付『世界・暴虐支那を怒る』、8 月 18 日付『支那尚も暴虐の砲撃』など、残酷な見出しが毎日のように朝日新聞には記されている。

一方 中国戦線での日本軍の活躍は、朝日新聞に毎日のように報じられている。その中には、信じられないような手柄話しや、小説のようにドラマチックなものも存在している。つまり、「戦場のありのまま」を報道していない、ということだ。

例えば 1937 年 11 月 1 日付の朝日新聞には、蘇州戦の様子を感動的に描いた『猿の如く駆け登って蘇河南岸に凱歌！』という記事が載っている。鈴木長夫部隊長が、敵弾が雨のように降るなか部下を集め、これから蘇州河を渡って敵陣に突入する、作業は無論決死の業で誰も生還は期待していない、がもし遺言があったら今自分が聞いてやる、と絞るような沈痛な声で言ったという。それに対して部下が「自分たちは天皇陛下の前に死ぬのが本望なので残すことは何もありません」と答えたが、結局見事に突破に成功し、両目にうれし涙をうかべてよろこんだ、という。兵士たちの具体的な会話も伝えられている。「何、大丈夫だ、こんな傷は直ぐ癒るさ、よかったなあ。。。」「本当にそうだ、君等の力でこそかつて支那が敵に渡らせたことがないと誇った蘇州河を見事突破できたのだ」と。<sup>8</sup> 軍事作戦の成功を伝える報道にしては、あまりに現実性が無すぎる。この記事の他にも日本兵の活躍を称える記事は沢山あるが、ほとんどが感動的な作り話の様なものばかりだった。当時こうした記事を読む一般市民は、一体どう感じていたのだろうか。

日本軍に関する報道にはもう 1 つ特徴がある。いかに中国軍より強く優れているかを、今の感覚でいえばこっけいなくらいに強調していることだ。そうした記事に頻繁に出没する言葉は「日本刀」、「武士道」であった。1937 年 9 月 4 日付の記事には、魔神の如き勇士達が「日本刀の斬味を知れ」と怒号し、3 列に並んでいる敵に斬込んだ、17 名の日本兵が 600 名の中国兵に斬り込み敗走させた。と全く無茶なことが書かれている。<sup>9</sup> また、1937 年 9 月 23 日付けの記事では、「安田部隊長」の軍刀が秋の陽を反射して凄まじいばかりの光を放ち、たちまち敵 600 を殲滅させ、「阿修羅の如き我が部隊の働きは無敵」であり、「血潮したたる軍刀を拭う将士の姿こそ誠に壮絶鬼神の姿であった」とまである。<sup>10</sup>

これらの記事が真実であれば、「南京大虐殺」の最中に向井敏明と野田毅によ

る百人斬り競争が起きた、ということも真実であろう。もしも、こうした話しが誇張のウソの報道だったとしても、なぜこのような残酷な「作り話」をわざわざ新聞紙面で一般市民に知らせたのか、理解に苦しむ。

一方 当時の朝日新聞には、ほぼ毎日 10 人以上の日本兵戦死者の記事が載っていたことにも注意が必要だ。多い日には記事は 2—3 ページにわたった。顔写真と一緒に所属した部隊の名前や、本人がどのような性格で、日本で戦前どのような生活を送っていたのか、さらには遺族のコメントまで具体的にリアルに書かれている。<sup>11</sup> 信憑性の薄そうな戦争報道とともに、詳しく正確な戦死者の紹介が載れば読者は、新聞が報道しているところは一体どこまでが真実なのか混乱したことだろう。

### Ⅲ. 南京陥落後の朝日新聞の報道

首都南京が陥落した 1937 年 12 月 13 日以降の朝日新聞は、一体何をどのように報道していたのだろうか。

朝日新聞には、12 月 13 日より 3 日も早く南京陥落ムードの記事が出ている。12 月 10 日は南京総攻撃が始まった日とされているが、12 月 11 日付の『号外に飛びつく群衆 占めたッ・握手だ』という記事では、「南京陥落の十日の夜、全市は歓喜一色に塗りつぶされた。電光ニュースに号外の鈴に速報に人達は待ちわびた感激を炸裂させる。号外の鈴に飛付いてゆく群衆は『いよいよ陥落したぞ』と雀躍している」とある。<sup>12</sup>

南京陥落を祝う記事は、1 週間に渡って新聞に大々的に載せられた。12 月 13 日の紙面には、『陥落祝いのお料理』なる記事が出て、敵の首都占領を祝う料

理を紹介している。それは、大和芋を加工して日章旗に似せた料理と南京豆を使った南京焼というもので、南京陥落のイメージを表しているようであった。<sup>13</sup> さらに12月15日の紙面には三越デパートが『陥落祝す』として半ページ程のバーゲンセール of 広告を出している。他にもナショナル、ビクターレコード、コロムビアレコード、明治屋などの企業が「南京陥落祝い」の広告を載せている。

朝日の紙面には、しばらく毎日のように日本軍のもたらす「安定と平和」を喜ぶ南京市民の笑顔の写真が載った。陥落から2日後の12月15日付の朝日新聞には、日本兵は南京市内の抵抗を続ける敗残兵を排除し、南京の秩序を回復したとある。<sup>14</sup> 同日付の2つの記事でも、日本軍が南京の治安の維持と建造物の保護を行い安全を確保したので、南京市民は速やかに避難所から帰宅し、日本軍を信頼するよう伝えた、とある。ただし日本軍の行動を妨害する場合は厳重に処する、ということも付け加えられている。<sup>15</sup>

12月21日付の記事では、すっかり親日になった南京市民の様子が伝えられている。

初めのうちは彼等も日本人を見るとこそこそ壁の影に隠れたものだがこの頃はすっかり日本の兵隊さんと仲良くなり兵隊さんが通りかかると『先生々々』とニコニコ顔で何か用事を言いつけて呉れと寄って来る程である。面子も何もあつたものではない。敗残国の悲しい運命を大きく達観して笑っている彼等の心理は寧ろ理解し難い位不思議なものを持っている。<sup>16</sup>

この記事には、中国人の子供1人が日本兵10人ほどに囲まれている「奇妙」な写真も付いていた。この写真の中国人の子供は、とても楽しそうな笑顔を浮かべているが、子供が言葉も通じない大人10人に囲まれて、果たして普通に笑

ってられるものなのであろうか。

さて当時の新聞をもう少し注意深く読んでいくと、必ずしも良いことばかりは書かれていない。 陥落後の南京には、多くの敗残兵が存在していた。12月16日付の記事では、敗残兵が軍服を脱ぎ捨て市民に化け、その数2万5千と推定され、「我軍は清掃に努力し、一方敗残兵の嫌疑あるものは取調べ、老幼婦女は保護を加えている」と伝えている。<sup>17</sup> 12月15日の朝日新聞に掲載された記事では、南京市の壮絶な現状が伝えられている。

敵の戦闘帽、米、老酎、手榴弾など徴発したらしい蓄音器と一緒にあたり一面に散乱し、建物の一部は傷病兵の収容所にあてられたと見え、傷病兵の臭いが一杯部屋中に充ちていた。公園の草花も全く枯れ果て、かくして大南京の街は散りはてた蒼梧の悲しさ共に全く死のような残骸の町となってしまったのだ。<sup>18</sup>

12月19日付の記事では、南京は敵兵の死骸8万9万で溢れているとすら報じている。<sup>19</sup> 南京市は、中国の子どもを日本の兵隊が可愛がるような友好ムードにあふれているどころか、あたり一面死骸だらけの壊滅状態で、緊張がはりつめた状態であることがわかる。

ここで注目しなければならないのは、南京の平和を伝える記事や写真は、大々的に新聞に載っているのに対して、南京市が戦争によって壊滅状態になっていると伝える記事は、あくまでも小さく、新聞の隅の方にしか載っていなかった、ということだ。

日本軍が大虐殺を行っていたと伝える記事は、当然のように見当たらなかったが、大虐殺の可能性を間接的におわせるような報道は、見つかった。12月5



日の紙面には すでに南京陥落を予測する記事『南京陥落の後に来るもの』が載っている。それによると、南京陥落は日本に対する中国の反省の好機であり、蒋介石の国民政府を反省させるためには、更に第2、第3の手段を尽くさなければならぬ、と論じている。<sup>20</sup> 12月23日、日本軍は更なる手段として翌年の元旦に南京自治委員会を発足させることを発表している。その目的は、中国南方地方における親日化、平和、そして「排日抗日分子」の「絶対排除」だ。これは、日本軍の南京入城により兵火に見舞われ家を失った場内残留支那人の自治精神から発したものと朝日新聞には説明されているが、実際は日本軍が設立させたものであろう。<sup>21</sup> たとえ女・子供であっても排日・抗日の態度を見せれば「排除」されてしまうということだ。

翌年1938年2月8日の朝日新聞に掲載された記事は、「南京陥落から約2ヶ月後、未だ敗残兵討伐が順調」と伝えている。南京陥落より約2か月もの間日本軍は敗残兵を追いかけ続けていたわけだ。南京大虐殺は、長くて2月13日まで続いたとされているが、この記事を信じるなら、まさにその間日本兵が敗残兵の清掃と称して捕虜・女・子供を惨殺していた可能性は高いのではないか。

興味深いことに、2月9日付の紙面の片隅には、小さく『陣残支那兵慰霊祭』という記事があった。無慮十万の支那軍陣没者の霊を慰め皇軍の武士道を示すため盛大な支那戦没者の慰霊祭を執行したとある。<sup>22</sup> よりによってなぜこのタイミングに、しかも10万という数字を出して中国兵の慰霊祭を行ったのだろうか。南京陥落以来、「何か」がようやく終結した、という報道なのだろうか。この頃になれば、その数ヶ月前に新聞が報道したような「平和」と「友好」「安定」は決して訪れてはいなかった、と気がつく読者も出てきていたのではないか。

## おわりに

日本軍の南京への道は険しいものだった。南京にたどり着くまでに戦死する友は増え続け、中国兵に対する憎しみは高まっていった。1937年12月20日付の朝日新聞は『南京制圧 同戦友の遺骨を抱いて堂々（南京）入城』という記事を載せている。<sup>23</sup> しかしそれが「復讐」というかたちで大虐殺を起こす口実にはなりえない。一方戦線から遠く離れたところでは、南京陥落記念の三越のバーゲンセールに浮き立つ日本の一般市民の姿が見える。彼らにとっては戦争に対する認識すら、まだばくぜんとしていたようにも思える。1937年12月19日の朝日新聞紙面には、『大地』という雑誌の広告が載っている。その宣伝文は次のようなものだ。

### 『大地』

北支は明朗となった。上海に続いて忽ち南京が陥落した!!  
支那と日本との関係は愈深くなる。日本人が支那及び  
支那人を理解する必要に迫られてくるのは之からだ。<sup>24</sup>

日中友好の必要が熱く語られたこの瞬間に、大虐殺は続いていたと考えるとやりきれない。私たちの世代が、1937年当時の日本市民と全く同じレベルで国際情勢を見ていることは許されない。以上、新聞記事を追って確信したことは、私たちは南京大虐殺という史実から逃げてはならない、ということである。

## 注

---

- 1 本多勝一 『中国の旅』（朝日文庫、1981年12月20日）p. 11。
- 2 石川達三 『生きている兵隊』（中公文庫、1999年7月18日）p. 205。
- 3 石川達三 『生きている兵隊』pp. 207、208。
- 4 本多勝一 『中国の旅』p. 267。
- 5 John W. Dower, *War without Mercy* (Pantheon 1986年) p. 42.
- 6 東京朝日新聞縮刷版 「支那人今や死に物狂ひ」1937年8月15日（夕刊），p. 3。
- 7 同上 「敵はみな餓鬼」1937年9月22日（朝刊），p.11。
- 8 同上 「猿の如く駆け登って 蘇州河南岸に凱歌！」1937年11月1日（朝刊），p. 2。
- 9 同上 「日の丸鉢巻十七名 六百の敵を斬捲くる やっつけた百余名」1937年9月4日（夕刊），p. 2。
- 10 同上 「斬ったり、敵六百」1937年9月23日（朝刊），p. 2。
- 11 例えば「夢枕に出た加藤君」という訃報記事は次の通りである。「加納部隊の戦死者加藤利一一等兵（30）は金属雑貨業慶造さん（60）の次男で家業を手伝っていたが原隊からの通知に先立ち三十日夕戦友の宮本勝三郎君から戦死の詳細が齎された。留守宅には妻とめさん（28）があり、一人息子の陸男君（2才）があり、慶造さんは語る。「十月八日の朝利一が私の夢枕に立ってお互いに無言で顔を見合わせました。今考えるとあの時は既に死んで居たのでした。四人兄弟の中でも本当によく出来た子でした」（「祖国鎮護の勇士 夢枕に出た加藤君」1937年11月1日（朝刊），p. 11）。「元気者の斎藤君」という訃報は、「戦死した浅田部隊の斎藤道治上等兵（31）は斎藤重太郎氏（38）の実弟で、築地の魚市場に勤めていた仲間でも評判の元気者、家族は母親ふささん（59）妻女みゑさん（28）と実兄夫婦と甥がある。」と戦死者の背景を詳しく伝えている。

---

る。「殉忠・生きて帰らじ」1937年11月3日(夕刊), p. 2)。

12 同上 「号外に飛びつく群衆 占めたッ・握手だ」1937年12月11日(朝刊), p. 7。

13 同上 「陥落祝いのお料理」1937年12月13日(朝刊), p.10。

14 同上 「街々に日章旗翻へり 南京の秩序回復」1937年12月15日(朝刊), p. 2。

15 同上 「南京市内の秩序 早くも整然」「南京に安民布告」1937年12月15日(夕刊), p. 1。

16 同上 「抗日のお題目忘れた南京住民 日毎加る親密さ」1937年12月21日(夕刊), p. 2。

17 同上 「なほ潜伏二萬五千 敗残兵狩り続く」1937年12月16日(朝刊), p. 2。

18 同上 「激變の歴史に感慨 残骸の敵首都を行く」1937年12月15日(朝刊), p. 2。

19 同上 「遺棄の敵屍實に九萬」1937年12月19日(夕刊), p. 1。

20 同上 「南京陥落の後に来るもの」1937年12月5日(朝刊), p. 3。

21 同上 「南京自治委員会 元旦に発会式」1937年12月26日(夕刊), p. 1。

22 同上 「陣残支那兵慰靈祭」1937年2月9日(朝刊), p. 2。

23 同上 「同戦友の遺骨を抱いて堂々入場」1937年12月20日(夕刊), p.1。

24 同上 「大地」1937年12月19日(朝刊), p.6。